母を偲ぶ

旭区支部　村上　保子（子）
戦没者　鈴木　保三
戦没地　フィリピン

母が結婚したのは昭和十五年で、当時父は横須賀の海軍工廠に勤めていた。翌年の十二月に真珠湾攻撃があり、直後に兄は生まれた。戦時体制になってゆく中、横須賀の海辺の街で、まだ穏やかな生活だったようだ。

父が十九年六月に出征した時に、私は母のお腹にいた。母は大きなお腹をかかえ、三歳の兄を連れ千葉の津田沼の兵舎まで面会に行った。もう面会はいいから大事にしてくれと言われたそうだ。七月に私が生まれ、八月には父がフィリピンで戦死してしまった。その時の母の落胆ぶりはすさまじいものだったと聞いている。母乳は止まってしまい、私はどのように育ったのか、母から聞かされたはずだが記憶が遠い。

父の実家に親子（私は乳飲み児）三人身を寄せた。実家も伯父がすでに戦死していたにもかかわらず、伯母、従兄、従姉、祖父が温かく迎えてくれ、それ以来この地で私達は暮らすことになった。他にもう一人の伯父家族と強制疎開の家族も受け入れ、双方夫が戦死の状況で、伯母や母

©2011_財団法人神奈川県遺族会

が戦中戦後の物もない中を生き抜くのは、想像を絶するものがあったと思う。母も私を背負い下駄の行商したり、近所や行商先の反物の仕立てを頼まれて、わずかばかりの収入で何とか生活してきたそうだ。

私が小学校に入る前に母は人の世話で中学校の用務員として横浜市の職員になれた。母が出勤してしまうと、私と兄は父の実家(本家)で過ごすことがほとんどで、そんなに寂しい思いをした記憶はない。私も学校に入学し、運動会や入学式、卒業式には、母の学校と重なってしまい来てもらえず、そんな時、他の家と違うのだということ、父親が家には居ないことを段々意識するようになった。しかし、父親の役もする気丈な母のもとで私達は育った。

人一倍向学心の強い母は子供の頃裕福ではなかったので小学校しかゆけなかった為か、私達に対しては行ければ上の学校へ行きなさいと夢を託した。兄も大学の工学部に入り、家計も大変だったと思うが、働く張り合いがあったと思う。

さてこれからという時、二度目の悲劇が母を襲った。兄が山岳部の合宿中遭難、母と私の前から去ってしまった。高校三年だった私は母の嘆き悲しみをもろに見ることになった。母はどうにかなってしまうのではないかと周りが皆心配した。勤務先へは一ヶ月以上も行けず、しかし職場の方々はじっと母の復帰を待っていて下さったそうだ。

私も自分の人生が大きく変わったが縁あって結婚し、三人の子供に恵まれた。そして母はずっとそばに居て、一緒に子育てを手伝ってくれた。ある日「この三人の孫のおかげで私は悲しみが癒えた。ありがとうネ」と言ってくれた時、これで大丈夫だと思った。

©2011_財団法人神奈川県遺族会

六十才の定年まで勤め、孫達の結婚を見届け、ひ孫まで見ることができ、九十才で穏やかに父のもとへ旅立って行った母、老後は少しは幸福だったのではないか。私は父からの贈り物だと思う。

©2011_財団法人神奈川県遺族会